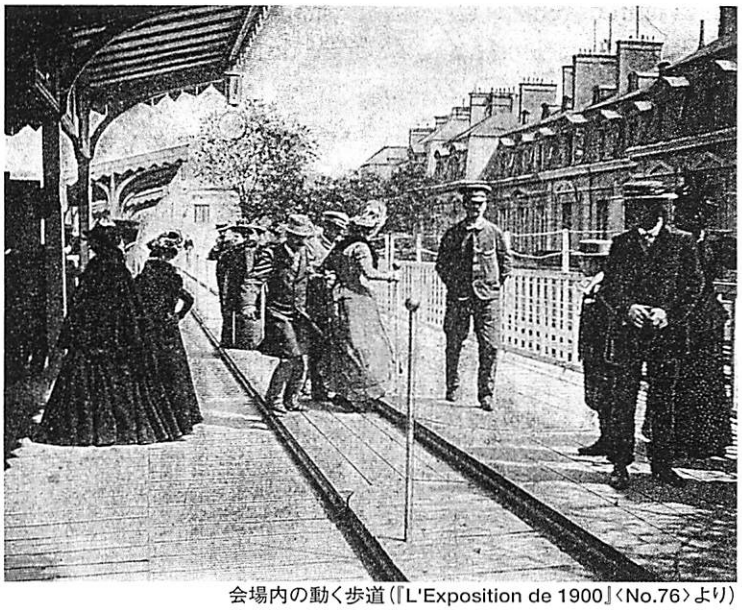
「イメージの時代」の予感 ～1900年パリ万国博覧会～

九州芸術工科大学 画像設計学科教授 脇山真治



会場内の動く歩道（『L'Exposition de 1900』〈No.76〉より）

1. 動く映像による万国博覧会の記録

「動く歩道の光景‥‥着飾った淑女たちの笑顔が通り過ぎる。彼女たちの影に、夏の日差しを感じる。ひげを蓄えた紳士が、おっかなびっくり足元を確かめる。そんな大人たちに混じって、ときおり子供が、いささか興奮気味に行き来している……」

1900年7月のある日。ここはエッフェル塔を間近に望むパリ万国博覧会の会場である。場内に設置された総延長4kmに及ぶ<動く歩道>は、来場者に人気の<乗り物>であり、この様子は誕生して間もない映画が鮮明にとらえていた。19世紀を総括し、続く100年を予見する名実共に史上最大のパリ万国博覧会は、200もの出展館と4700万人を超える動員が、何よりもその規模と成果を示していた。

1895年12月28日、パリはキャプシーヌ大通りのグラン・カフェでその歴史は幕を開けた。フランスのリュミエール兄弟が開発した映画「シネマトグラフ」が、はじめて公開されたのである。映画の発明をめぐってはオーギュスタン・ル・プランス、エジソン、レオン・ゴーモン、ジョルジュ・ドゥメニなど多くの人物の名前があがってくるが、一般的にはこのシネマトグラフの公開が映画の発明日でありリュミエール兄弟が発明者とされる。

そのわずか5年後、映画会社を組織したリュミエールの姿はパリ万国博覧会の会場にあった。冒頭の動く歩道のシーンは、彼らの撮影によるものである。史上初めて万国博覧会が<動く映像>として記録された。

2．映像の博覧会

2-1　リュミエールの大型映画

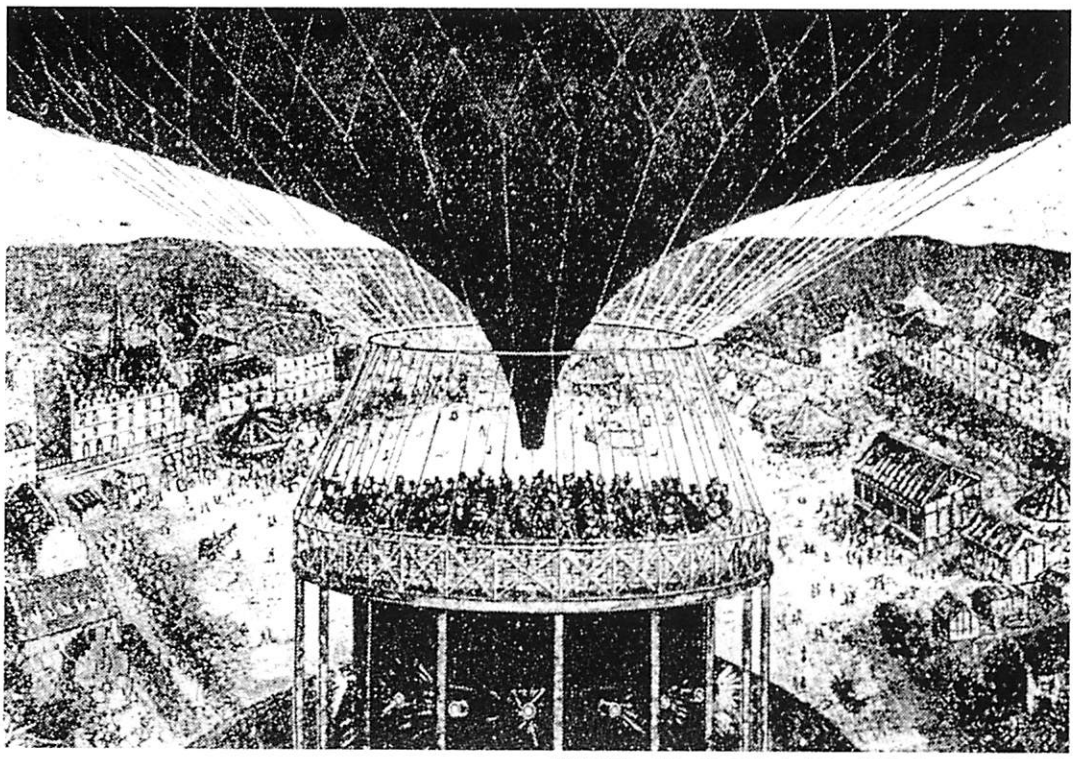
映画の発明までに注がれたリュミエール兄弟の飽くなき探究心は、その後も持続していた。彼らはさらに新しい技術開発にも挑戦し、その成果を1900年パリ万国博覧会に持ち込んだ。機械展示館の大空間に21m×16mの巨大スクリーンが張られた。彼らが出展したのはほかならぬ大型映画であり、このために75mmのフィルムが開発された。スクリーンは館内の中央に張られ、表裏どちらからの鑑賞も可能で、一度に25,000人の観客が巨大な映像を楽しんだという。大型の映像は巨大さゆえの非日常性、仮想現実感、エンターテインメント性等の特徴的な側面をもち、同時に博覧会の新奇性、祝祭性、未来性といった要件をも満たしていた。この企画が、シネマトグラフの開発の延長線上にあったとしても、その公開の場と時期を万国博覧会に定めたリュミエールの先見性を評価したい。

映像を大型化する試みは現在まで引き継がれており、IMAXを代表に多くの形式が実用化され「大型映像」というジャンルを確立するに至った。実はリュミエールの企画の原案は、エッフェル塔の塔脚に30m以上のスクリーンをわたし、そこを上映会場とする、まさに世紀の博覧会にうってつけの目論見（もくろみ）だった。強風のために中止されたものの、大型映像の可能性を一気に高めようとした彼らの発想には驚くばかりである。

2-2　＜音つき映画＞の試み

リュミエールの友人クレマン・モリスは、早くも＜音＞に着目していた。古くは、幻灯機の興行時代から映像と音を同時に流す試みは行われており、彼が蓄音機と映画とを組み合わせて＜音つき映画＞を目指したのは当然の成り行きだった。すでにエジソンの蓄音機「フォノグラフ」は前回のパリ万国博覧会（1889年）で実演展示を行っており実用の域に達していた。問題は映画と音の同調である。クレマン・モリスは実に素朴な方法を考案した。発声装置をスクリーンの前に置き、その音を電話線を引き回して映写室にもってきた。そして聞こえてくる音にあわせて、映写技師が上映のスピードを調整するというものである。原始的だが多少の音ズレは即興的に修正してしまう。観客には不思議なほど＜シンクロした音つき映画＞だったに違いない。クレマン・モリスが1900年パリ万国博覧会に持ち込んだのはまさにこの「フォノ・シネ・テアトル」である。

映画の発明からわずか数年にしてトーキーへと展開するその発想と技術スピードには恐れ入るが、他にも出展された同様の企画を尻目に、会場で最高の人気を得たのは、「フォノ・シネ・テアトル」だった。これは技術的に評価されたというより、彼の映画にはサラ・ベルナールといった当時の有名俳優や人気歌手が登場したのと、他の出展者の及ばない派手な広報・宣伝活動の成果によるといわれている。イメージで人気を勝ち取るあたり、今日の博覧会出展戦略を図らずも先取りしている。



グリモアン・サンソンの「シネオラマ」(『ナチュール』誌より)

2-3　サークルビジョンの登場

映画が初めて公開される直前まで、リュミエール兄弟と技術的開発にしのぎを削ったのがラウル・グリモアン・サンソンである。彼の手による映像史に残るもうひとつのプロジェクトがこの博覧会場にあった。360度全周映画の「シネオラマ」で、気球に乗って世界を巡る仮想の旅を実現しようとしたのである。撮影用の10台のカメラを放射状に並べて気球に搭載し、世界各地でロケを敢行した。そして観客に最高のツアーを満喫してもらうため、上映館内は巨大な気球を造形化して、直径約30mの全周スクリーンの劇場とした。さらに観客席は劇場中央の映写室の上に置き、ゴンドラを模した空中デッキという凝りようである。旅は非日常的な行動である。特に当時は移動手段ひとつとっても相当の制約があり、時間的にも経済的にも恵まれた人々の特権的道楽だった。「シネオラマ」は多くの人々につかの間の夢を与えた。観客は中空の客席からまだ見ぬ世界を俯瞰(ふかん)しながら、不可思議な浮遊感覚と臨場感を驚くべき迫力の映像で堪能したことだろう。

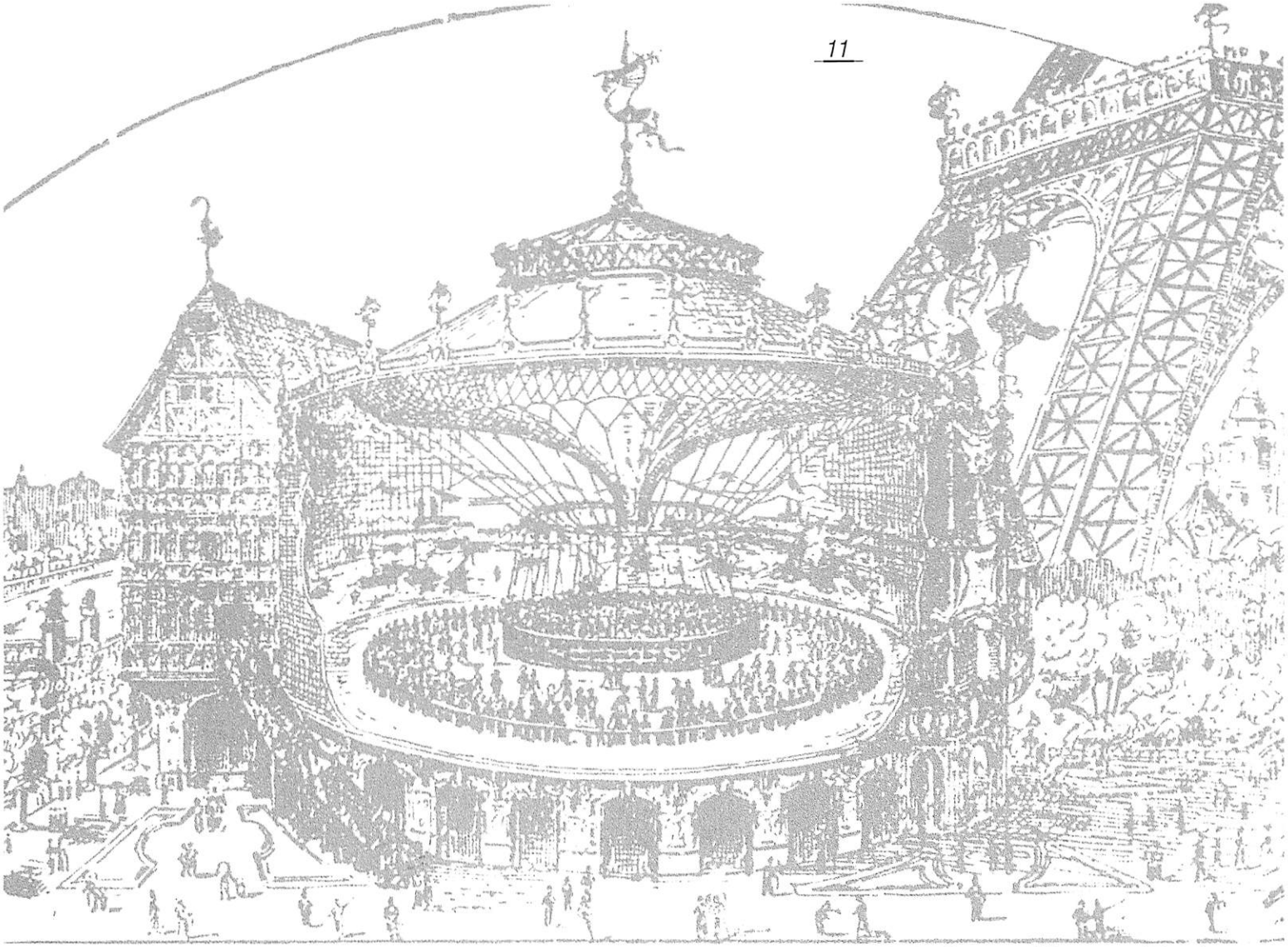
残念ながらこの興行は、映写機の発熱で映写技師が倒れて、火災の危険性も指摘され、初日4回目の上映にして敢え無く中止となり文字通りの<夢のプロジェクト>となった。しかし黎明期の映画をここまで応用する発想は、その後「サークルビジョン」として進化し、テーマパークや博物館で上映され、博覧会においてはモーションライドやライブとの複合演出の中で使われており、全周映像の持つ独特の仮想体験空間を世界中で演出しつづけている。

3. バーチャル・ツアーの出展

19世紀末までの人気娯楽のひとつに「パノラマ」があった。1900年のパリ万国博覧会当時、すでに人々の関心は映画に向かっていたが、このパノラマは地道に進化を遂げ、映像展示にも決して見劣りしない大型アトラクションとしてこの博覧会に出展された。「シベリア横断鉄道」と名づけられた一種のムービングパノラマは、客車を模したシアターに観客を座らせ、窓越しにモスクワ～北京の風景を見ながら旅をするというものである。背景は4層の可動式の平面画だが、十分に視野を覆うだけの面積があり、観客は期待通りの夢の旅に酔いしれたのである。

一方、海の旅を疑似体験するアトラクションもあった。「マレオラマ」である。客席は実寸に近い客船。ピッチとロールの船の揺れが付加され、巨大な背景画はその巻取りと送り出しのシリンダーにセットされて、観客は横に流れる景色をながめながら船旅の錯覚を味わった。このシアターは、まさにモーションライドを使った疑似体験劇場である。背景は高さ15m、ロールの長さは750mにもなり、そこに描かれたマルセイユ、ナポリ、スエズ運河、シンガポールといった世界の代表的な風景を眺めて船旅を楽しむ。操船担当は役者を使った。さらに<海の匂い>を出すために、塩水を含ませた海草の間を通して風を送ることまで考えられた。

見事な演出である。今でこそ背景画は高精細な大型映像にかわり、客席の駆動装置や制御技術も随分進歩したが、これらは文字通り<バーチャル・ツアー>そのものではないか。現在、海外



エッフェル塔の横の「シネオラマ」(『ナチュール』誌より)

旅行は日常的になったとはいえ、1900年当時にあってこの疑似体験で、多くの観客はエキゾチズムを満喫し、ひとときの異国への旅を堪能しただろう。未知の旅行を疑似的に体験するという発想とコンセプトは、その後100年の間に、さまざまな手法と技術の変遷をたどりながら、今に引き継がれている。

4. 予見された「映像博覧会」

1900年のパリ万国博覧会にはその他にもさまざまなビジュアルディスプレイが登場した。18世紀後半のパノラマ館やジオラマ館の隆盛と写真や映画などの発明は、同時にその周辺技術の拡大とさまざまな応用を可能にし、新しいコミュニケーションと表現の手法を次々に確立していった。発明と改良と応用に注がれたエネルギーは、その一部がパリの博覧会場で公開されたものの、100年後の今日まで間断なく続いた。20世紀の幾多の国際博覧会では、映像展示は映像の精細度やシステム、制御技術、さらには見世物としての新奇性や良質なエンターテインメントの側面を徐々に高めながら、リュミエールやグリモアン・サンソンの夢を引き継いできた。その意味では19世紀の総決算としてのパリ万国博覧会は、同時に<イメージを展示する>今世紀の博覧会を予見し、嚆矢(こうし)となるイベントとして評価したい。

それから100年、多くの博覧会は「またしても映像か」と揶揄(やゆ)されながらも、結局はある種の模範解答として、あるいは不可欠な展示要素として、堂々と「映像博覧会」を謳歌しつづけている。

参考文献

1 Le livre des expositions universelles 1851-1989,1983

2 Jean-Michel Place "Scénographie Théâtre Cinéma Télévision" 1990

3 岡田晋『映画の誕生物語』美術出版社 1980

4 J.サドゥール『世界映画全史3』村山匡一郎他訳 国書刊行会 1994

5 ベルナール・コマン『パノラマの世紀』野村正人訳 筑摩書房 1996